

## ボリビアのコロニアオキナワにおける教育史と現在の教育環境: 沖縄県系移民2世以降の言語継承

Educational History and Current Educational Environment in Colonia Okinawa, Bolivia:

Inheritance of Japanese Language in Second and Later Generations of Okinawan Immigrants

小山 あゆみ(東北大学大学院 国際文化研究科 博士後期課程)

Ayumi Oyama (Graduate School of International Cultural Studies, Tohoku University)

キーワード: 移民・南米・沖縄・言語継承・教育史

### 研究の目的

本研究は、ボリビアのコロニアオキナワという地域に住む沖縄にルーツをもつ日系人(以下、沖縄県系人)2世以降の言語の継承について、教育史と現在の教育環境について調査を行った。従来の研究では、移民の言語は3世代で現地語へシフトすると言われてきた(高橋, 2008)。しかしボリビアでは、移民3世、4世においても日本語の使用がみられ、他の南米の国とは異なり、継承語としての日本語教育が行われている(国際交流基金, 2017)。さらに、コロニアオキナワでは入植当時、主に沖縄方言が話されていたが、現在は標準日本語(以下、日本語)のみ継承されている(朴, 他, 2014)。コロニアオキナワへの移民は、第二次世界大戦後に沖縄県が米国統治下にあった期間に琉球政府の計画移民として入植し、日本政府の管轄外であった。そのような状況で、沖縄方言ではなく、日本語が継承された事実は非常に興味深い。本報告では、言語継承において特殊な環境であると言えるコロニアオキナワを取り上げ、教育史と現在の教育環境を調査し、彼らの言語継承に影響を与えたものを明らかにすることを目的とする。

### 先行研究との差異

コロニアオキナワの研究は、ボリビア研究を含めてもそれほど多くない。先行研究では、南米のスペイン語圏の日系移民における日本語教育について調査がされている(国際交流基金, 2017)。また、コロニアオキナワの移民定住率(石川, 1986)や、移民の経緯(中山, 2018)について、近年では、ブラジルの日系移民における話し言葉との比較研究が行われた(朴, 他, 2014)。だがこれまで、教育史については具体的な研究が十分に行われてこなかった。本研究では、コロニアオキナワでの日本語継承に影響を与えたであろう教育史について解明を進め、現在の教育環境についても言及を行う。

### 研究内容と研究方法

本発表では、半構造化インタビュー、コロニアオキナワの教育に関わった宗教団体の当時の資料や手紙などから、教育史を解明する。コロニアオキナワへの入植から約70年が経過し、教育に携わった1世は亡くなった方も多し。そのため子ども移民として入植した1世へのインタビューを中心に、証言や資料から教育史を探究した。現在の教育環境については現地の学校から得た情報や資料を分析し、現地の教員、沖縄県からの派遣教員、生徒や卒業生などから情報を集めた。

### 分析結果と課題

コロニアオキナワの教育史には、琉球政府とは全く異なるルートで日本から渡ったカトリックとプロテスタントの宣教師が大きな影響を与えたことが明らかになった。また、ボリビアへ移民した成人の1世は、井戸も道も無い過酷な環境への入植だったにも関わらず、入植から1ヶ月後には幼稚園と小学校を開校した。この背景には、彼らの教育への意識の高さを感じられる。特に第1次移民は400名の募集に対して4,000名以上の応募があり、厳しい移住資格条件(琉球政府農林局農政部移民課, 1967)をクリアする必要があったため、当時のボリビア移民は優秀な人材が多く、教員免許保持者が5、6名おり、戦前の航空大尉、満州開拓長、巡査や獣医などが移民者として採用された(具志川市史編さん委員会, 2002年)。

コロニアオキナワで沖縄方言ではなく、日本語が継承されている大きな理由の一つに、プロテスタント牧師が行なった方言札を使用した日本語教育がある。方言札の使用については、移民1世へのインタビューから明らかになったもので、これまでの記念誌や先行研究などでは触れられてこなかった事実である。方言札の使用は一般的にネ

ガティブな印象があるが、当事者へのインタビューでは、方言札を使用したことや、日本語の指導について、プロテスタントの牧師夫妻への感謝の声が多くあった。その理由としては、日本語を十分に話せることで、他国への再移住(新たな日本人コミュニティへの参加のしやすさ)や、日本への帰国(沖縄県以外への定住)など選択肢が増えたこと、就職の受け入れ先が多いことなどが挙げられた。さらに興味深い点として、コロニアオキナワの沖縄県系人は50代以上よりも40代以下の方が日本語運用能力が高い傾向にあることがわかった。この事実に関しては、沖縄県が行なった、沖縄県派遣教員の制度が大きく影響していると考えられる。

現地の日本語学校校長によると、現在の教育環境について4世、5世は、ボリビアとの混血が進んでいることや、現地での就職を見据えて、家庭内でスペイン語使用が増加傾向にあるため、日本語の能力が年々低下しているとの話があった。しかし、コロナの影響により、職業選択を増やすという意味で、改めて日本語を重視する家庭も増えてきているとのことである。また、沖縄方言が継承されていない一方で、コロニアオキナワの若者へインタビューを行う中で、彼らが沖縄との繋がりを強く感じていることがわかった。彼らは、“ボリビアのウチナーンチュ”としての誇りを語ってくれた。また、コロニアオキナワの農産物を日本へ輸出するプロジェクト「OKINAWA To 沖縄」を沖縄県系人3世をはじめとする若い世代が中心に行っている。

今後の課題として、コロニアオキナワの沖縄県系人の言語継承に影響を与えたと考えられる、下記2点に着目することができる。1点目は、1990年の出入国管理及び難民認定法の改正に伴い、日系人が日本に出稼ぎに来やすくなったことである。2点目は、沖縄県が始めた、在外沖縄県系移民への活動である。具体的には1986年から沖縄県教員をコロニアオキナワへ派遣し、日本語や文化の継承活動を開始した。現在はJICAが活動を引き継いでいる。さらに1990年からは5年に1度、在外沖縄県系移民を対象とする大規模なイベント「世界のウチナーンチュ大会」を行っている。これらを探求することで、移民の言語継承に影響を与える事象を具体的に示すことができるのではないかと考える。

#### 主要参考文献

- 石川友紀(1986)「ボリビア国コロニアオキナワ移民の再移住に関する実証的考察」、琉球大学・沖縄地理学会『沖縄地理(1)』、53-64頁。
- 具志川市史編さん委員会(2002)『具志川市史第4巻 移民・出稼ぎ証言編』、具志川市教育委員会。
- 国際交流基金(2017)『南米スペイン語圏日本語教育実態調査報告書2017』、国際交流基金。
- 高橋朋子(2008)「日本生まれのニューカマーの子どもたちへの継承語教育について考える」、大阪大学留学生センター『大阪大学留学生センター研究論集 多文化社会と留学生交流』第12号、61-74頁。
- 中山寛子(2018)「第二次世界大戦後における沖縄からのボリビア移住に関する一考察:読谷村の集団移住を中心に」、法政大学沖縄文化研究所『沖縄文化研究』45巻、505-557頁。
- 朴秀娟・森幸一・工藤真由美(2014)「沖縄系2世における言語生活史と日本語保持に関わる要因:ブラジルとボリビアの沖縄系移民社会の場合」、大阪大学大学院文学研究科日本語学講座『阪大日本語研究』26号、1-32頁。